

# News Letter vol.20 2011. 8.24

## 9<sup>th</sup> ISRPF に参加して

派遣国名: インド共和国

派遣期間: 2011.8.8~2011.8.16

学会名: 9th International Symposium on Reproductive Physiology of Fish

近年、私達のタンパク質源として不可欠な水産資源の枯渇が世界規模で危ぶまれています。その原因として、人口増加による需要の拡大、漁業技術の高度化による漁獲量の増加、さらには海洋汚染による魚類の生息環境の悪化などが挙げられ、資源管理や増養殖による解決が急務となっています。

2011年8月9日から14日までの6日間、インド南西部に位置するThrissurのLulu International Convention Centerで開催された“9th International Symposium on Reproductive Physiology of Fish (9thISRPF)”は、水産資源の維持・安定供給の基礎情報となる魚類生殖生理学の国際シンポジウムです。世界の第一線で活躍する研究者らにより、高度な分子生物・生殖工学的手法を用いた研究成果の発表が行われました。私は海産魚実験モデル種であるホシササノハベラというベラ科魚の卵形成における、組み換え生殖腺刺激ホルモンの機能についてのポスター発表を行いました。一般に、魚類の組み換えホルモンは酵母や昆虫培養細胞を宿主として作製される例が多く、本発表におけるカイコの生体内での組み換えホルモン作製法は、アメリカ、中国、ニュージーランド等の研究者に興味を持って頂き、活発な議論の中で自分自身の研究の国際的な位置付けを確認することができました。また、他の研究発表により、ホルモン遺伝子を組み込んだプラスミドDNAを魚体に投与することで、生体内で組み換えホルモンを直接産生させることが可能であることを知りました。このような最新の知見とこれまでに自分が行ってきた研究をあわせ、現在私達の研究室で展開しているマサバ・マグロ等の水産有用魚種の生産に応用できればと考えています。



ルールインターナショナルコンベンションセンター



学会のウェルカム・ボード



さらに今回のシンポジウムで印象的だったのは、ウナギやサケ科魚類の研究で、最近発展した次世代型シーケンサーを駆使した生殖関連遺伝子の網羅解析の成果がみられたことです。私達の研究室でも同様の手法でマサバの遺伝子解析に着手し始めたところですが、分析機器の進歩により今までにないスピードで得られる情報を、体系的に処理・解析する体制を整える必要があることを改めて実感しました。

以上のような経験は、今後の研究を進めるにあたっての大きなモチベーションとなりました。末筆となりましたが、本派遣事業でご支援を頂きました先生方やスタッフの皆様には厚く御礼を申し上げます。

どうもありがとうございました。